

Old Possum's Book of Practical Cats 覚え書き— "Macavity: the Mystery Cat"の謎¹⁾ —

中 尾 真 理*

Old Possum's Book of Practical Cats

— The Mystery Cat and Prof. Moriarty —

Mari Nakao

要 旨

T. S. エリオットの子供向けの詩集『ボッサムおじさんの現実味のある猫の本』と、その中の「謎の猫マカヴィティ」をとりあげる。エリオットはこの詩集でも、『不思議の国のアリス』や『マザー・グース』から親しみのある言葉やリズムを効果的に利用している。ここに登場する猫たちは擬人化されているが、いかにもロンドンの猫らしく、泥棒猫、手品師猫、鉄道猫など、その生態もさまざまである。その中で、「謎の猫マカヴィティ」には、コナン・ドイルの有名な探偵小説を下敷きにし、猫の正体を問う謎々が仕掛けられている。手がかりはこの猫が「犯罪のナポレオン」と呼ばれていること。

本稿は「謎の猫マカヴィティ」を読み、エリオットらしい諧謔に満ちたノンセンス詩に仕掛けられた謎を解く。「ボッサムおじさん」の仮面に隠された大詩人の知られざる一面に近づくための覚え書きである。

T. S. エリオットの子供向けの詩集*Old Possum's Book of Practical Cats* (『ボッサムおじさんの現実味のある猫の本』) がアンドルー・ロイド＝ウェバーのミュージカル「キッツ」(1981年初演)の原作であることはよく知られている²⁾。また、*Old Possum's*の中の"Macavity: The Mystery Cat"という詩のかなりの部分が、コナン・ドイルのシャーロック・ホームズからの借用であることも、シャーロッキアンの間では「公然の秘密」である。*Murder in the Cathedral*の中で、ドイルの「マズグローヴ家の儀式」を意図的に使ったエリオットである。ロンドンの下町の猫の生態を描いた子供向きの詩に、ホームズの宿敵の特徴をそなえた猫を紛れ込ませたのは、いかにもエリオットらしい諧謔と言えるだろう。この覚え書きは「謎の猫マカヴィティ」の正体に焦点をあて、*Old Possum's Book of Practical Cats*を読んだものである。"More British than British"と言われるT. S. エリオットだが、この*Old Possum's*にどんなロンドン情景を描いているのだろうか。エリオットのあまり知られていない一面に迫ることを視野に入れつつ、まずは思いつくままに覚え書きとしてまとめたものである。

〔一〕 *Old Possum's Book of Practical Cats*の猫たち

エリオットは1939年に*Old Possum's Book of Practical Cats* (『ポッサムおじさんの現実味のあ
る猫たちの本』)という詩を書いた。"Old Possum"³⁾ というのはエズラ・パウンドがエリオット
につけたニックネームで、猫好きの彼がさまざまな猫の生態を詩の形で描いたノンセンス詩であ
る。全部で15の詩からなっており、どれも題名の通り、現実的で実際にいそうな猫たちの詩であ
る。登場する猫は擬人化されており、ファンタスティックな名前を持っている。また、擬人化さ
れた性格も、泥棒猫、こそ泥猫、手品師猫、劇場猫、鉄道猫、クラブに出入りする粋人の猫など
いかにもロンドンっ子らしい顔ぶれである。以下に、各詩のタイトルとそこに登場する猫の特徴
をあげておく。

- (1) 「猫に名前をつけること ("The Naming of Cats")」・・・猫には名前が3つある。普通の
名前、いかにもその猫らしい特別の名前、そして誰にも知らせない秘密の名前。
- (2) 「ガンビーおばさん猫 ("The Old Gumbie Cat")」・・・ほとんど唯一の雌猫、お節介なお
ばさん猫。
- (3) 「吠える虎最後の抵抗 ("Growltiger's Last Stand")」・・・「テムズ川の恐怖」の異名を
持つ悪党猫。
- (4) 「ラム・タム・タガー ("The Rum Tum Tugger")」・・・あまのじゃくな飼い猫。
- (5) 「ジェリクル猫の歌 ("The Song of the Jellicles")」・・・優雅でダンス好きな猫たち。
- (6) 「マンゴージェリーとランブルティージャー ("Mungojerrie and Rumpelteazer")」・・・公
園をねじろにする二匹のこそ泥猫。
- (7) 「申命記じいさん ("Old Deuteronomy")」・・・郊外の村のバブに暮らす、長命で9匹も
妻を持っていた猫。
- (8) 「ベキニーズ犬とヨークシャー・テリア大合戦 ("Of the Awefull Battle of the Pekes and
the Pollicles")」・・・犬たちの戦いを一喝する大物の猫 (the Great Rumpuscat) が登場。
- (9) 「ミスター・ミストフェリーズ ("Mr. Mistoffelees")」・・・全身真っ黒な手品師の猫。
- (10) 「謎の猫マカヴィティ ("Macavity: the Mystery Cat")」・・・犯罪のナポレオン。後述。
- (11) 「劇場猫ガス ("Gus: the Theatre Cat")」・・・本名アスパラガス、かつての性格俳優。
- (12) 「粋人バストファー・ジョーンズ ("Bustopher Jones: the Cat about Town")」・・・セン
ト・ジェイムズ界隈の伊達者猫。
- (13) 「鉄道猫スキンプルシャンクス ("Skimbleshanks: the Railway Cat")」・・・夜行寝台特
急に乗務する猫。
- (14) 「猫に話しかけるには ("The Ad-dressing of Cats")」・・・単純な犬とは違い、猫には敬
意を払うことが必要。
- (15) 「猫のモーガンが自己紹介いたします ("Cat Morgan Introduces Himself")」・・・ブルームズベ
リー・スクエア(その一角にエリオットが重役をしていたFaber and Faber社⁴⁾の建物もある)の門番猫、かつては海賊だった。なお、この詩は版により、入っていない場合がある⁵⁾。

各詩のタイトルを見ればわかるように、それぞれ個性的な猫たちだが、登場するのは殆どが雄猫である。雌猫は(2)のガンビーおばさん猫だけで、その他、1, 2の名前があがるだけである。犬がたびたび登場するが、たいていは猫の敵である。(8)のペキニーズとヨークシャー・テリアは集団で乱闘に及ぶ。これには警察犬も登場する。(15)の門番猫モーガンは下町言葉で語っている。

背景となるのはロンドン近郊の村、テムズ川の川沿いの町、公園、住宅街、劇場、駅、セント・ジェイムズ宮殿からベル・メル界限、ブルームズベリー・スクエアなどで、いかにもロンドンらしい背景が選ばれている。

おとなしい猫だけではなく、市民社会を脅かす無法者の猫も数多く登場する。「テムズ川の恐怖 (The Terror of the Thames)」の異名を持つ鶏小屋荒らし (Growltiger)、コンビで荒らし回るこそ泥 (Mungojerrie and Rumpelteazer)、お尋ね者の犯罪猫 (Macavity) など悪党猫が多いことも特徴だ。飼い猫のラム・タム・タガーも悪戯をするし、門番猫はかつては海賊だったのが自慢である。劇場猫ガスの当たり役は「荒野の悪魔 (The Fiend of the Fell)」というならず者だった。

また、手品師や年老いた劇場猫など、演劇関係の猫が二匹いるのもエリオットらしく、またロンドンらしい。

〔二〕『マザー・グース』、『不思議の国のアリス』、謎々 (riddle)

長編詩でもそうであるように、エリオットは *Old Possum's* でも『不思議の国のアリス』や『マザー・グース』を巧みに使っている。

たとえば、(1)の "The Naming of Cats" には3行目に、"You may think at first I'm as mad as a hatter" とある。"As mad as a hatter" の慣用句は、一般には『不思議の国のアリス』の帽子屋 (Mad Hatter) としてイメージが定着している。

(14)の "The Ad-dressing of Cats" では、45行目に、"Ad-dress him in this form: O CAT!" とある。これは、『不思議の国』でアリスがネズミに話しかける時に、"O Mouse!" と呼びかける場面のパロディ。アリスはこの後、ネズミにフランス語の教科書の最初にあった "Oú est ma chatte?" の文章を口走り、ネズミは驚いて逃げてしまう。

(2)の "The Old Gumbie Cat" には、"- and that's what makes a Gumbie Cat!" がリフレインとして繰り返される。『マザー・グース』の "What Are Little Boys Made of" の中のリフレイン "That's what little boys are made of" が使われている。

このように子供たちのよく知っている『不思議の国のアリス』や『マザー・グース』が使われるだけでなく、(10)の「謎の猫マカヴィティ (Macavity: the Mystery Cat)」には、子供にも人気のある本の登場人物を使った謎かけ (riddle) が仕組まれている。問われているのは猫の正体である。冒頭の行に「手がかり」があり、あとは順次、ヒントとなる言葉がばらまかれ、最後に決定的なきめ言葉 (the Napoleon of Crime!) が投げつけられる。さて、読書好きの諸君、おわかりになりましたかな、と言うわけである。

[三] ドイルとエリオット

エリオットは『大聖堂の殺人 (*Murder in the Cathedral*)』の中でアーサー・コナン・ドイルの「マズグレーヴ家の儀式 ("The Musgrave Ritual")」の儀式文を使った。Part I. Canterbury大司教Thomas à Becketが第二の誘惑者 (Tempter) と問答をするところである。

Thomas: Who shall have it?
 Tempter: He who will come.
 Thomas: What shall be the month?
 Tempter: The last from the first.
 Thomas: What shall we give for it?
 Tempter: Pretence of priestly power.
 Thomas: Why should we give it?
 Tempter: For the power and the glory.
 Thomas: No!

(*Murder in the Cathedral*, 1936)

ドイルの"The Musgrave Ritual"には、謎の儀式文 (17世紀の文書ということになっている) が出てくる。それは次のような問答である。

"Who shall have it?
 "He who will come.
 "What was the month?
 "The sixth from the first.

 "What shall we give for it?
 "All that is ours.
 "Why should we give it?
 "For the sake of the trust." ("The Musgrave Ritual", 1893)

ドイルの短編はよく知られているので、両者の相似にはさすがに気づく人も多く、*The Time's Literary Supplement* の紙上で論争になったこともあった。その後、1951年9月28日号の投書欄に、Nathan L. Bengisという人物が手紙を寄せ、この点に関するBengis氏の質問に答えたエリオットの手紙の一部を公開して、ようやく論争の結着がついた。それによると、エリオットはドイルの短編の一部を意識的に使ったのであり、明確にそうBengis氏に答えている。

・ ・ ・ Remembering Sherlock Holmes's warning about the danger of theorizing before one

has all the evidence, I wrote to Mr. Eliot in May of this year and asked him about the matter point-blank. I quote with permission from his reply: " . . . My use of the Musgrave Ritual was deliberate and wholly conscious."

(*The Time's Literary Supplement*, September 28, 1951)

エリオット自身が『タイムズ文芸付録』紙上で直接答えたわけではないのだが、投書主のBengis氏は「エリオット氏の許可を受けて」と断っており、また、エリオット存命中のできごとでもあるので、投書の内容は信頼してもいいだろう⁶⁾。

エリオットと Doyle との関係については指摘する研究書も少なくないが、その多くは Doyle の名前に言及しているのみである。その中で Grover Smith の *T.S. Eliot's Poetry and Plays* にはやや詳しい指摘がある。Grover Smith によると、最初に両者の相似に気付いて指摘したのは Elizabeth Jackson という人だそうだが、これについては *Notes and Queries* CXC III に "T.S. Eliot and Sherlock Holmes" という Smith 自身の短い論文があるので、詳細はそちらに譲りたい⁷⁾。

[四] マカヴィティの謎

さて、問題の「謎の猫マカヴィティ」である。詩は全体が41行からなる。ここでは、便宜上7つのパートに分け、各パート毎に、猫の正体に焦点をあてながら、見ていくことにする。

[1～4行目] まず、冒頭の行で Macavity が謎の猫であることが歌われる。"Myterious Cat" (謎めいた猫) ではなく、"Mystery Cat" (ミステリー猫) であることに注意。これが、Macavity の正体を暗示する最初の手がかりとなる。(以下、括弧内の数字は行を示す)

Macavity's a Mystery Cat: he's called the Hidden Paw
 For he's the master criminal who can defy the Law.
 He's the bafflement of Scotland Yard, the Flying Squad's despair:
 For when they reach the scene of crime——*Macavity's not there!* (1-4)

Macavity は法に楯突く名人級の犯罪人 (the master criminal who can defy the Law) で、ロンドン警視庁 (Scotland Yard) や特別機動捜査隊 (the Flying Squad) が到着した時には、Macavity は影も形もない!

[5～10行目] Macavity は天下無双 (there's no one like Macavity)、人間の法律を破る (He's broken every human law) だけでなく、引力の法則にも逆らって (he breaks the law of gravity) 空中浮揚 (levitation) をする。天に昇ったか、地下にもぐったか、いずれにせよ犯行現場 (the scene of crime) に彼の姿は見つからない。"Macavity, Macavity, there's no one like Macavity" および、"*Macavity's not there!*" がリフレインとして、繰り返される。

Macavity, Macavity, there's no one like Macavity,
 He's broken every human law, he breaks the law of gravity.
 His power of levitation would make a fakir stare,
 And when you reach the scene of crime——Macavity's not there! (5-8)

[11～16行目] さてその猫の風貌である。

Macavity's a ginger cat, he's very tall and thin;
 You would know him if you saw him, for his eyes are sunken in.
 His brow is deeply lined with thought, his head is highly domed;
 His coat is dusty from neglect, his whiskers are uncombed.
He sways his head from side to side, with movements like a snake;
 And when you think he's half asleep, he's always wide awake. (11-16) (以下、下線は筆者)

「黄みがかった赤色 (ginger)」という猫にしては変わった毛色をしている。「背が高く痩せている (tall and thin)」のは、猫のことだから、足が長く痩せているのである。「目が落ちくぼんでいて (for his eyes are sunken in)」、「額が高く出っ張っている (his head is highly domed)」と個性的な容貌に加え、「頭を蛇のように左右に揺り動かす (He sways his head from side to side, with movements like a snake)」奇妙な癖がある。

[17～20行目] Macavityが猫の姿をした悪魔 (a fiend in a feline shape) であり、邪悪な怪物 (a monster of depravity) であることが語られる。犯罪が発見されたときには、彼の姿は影も形もない。

[21～26行目] ここではMacavityの行状が語られる。

He's outwardly respectable. (They say he cheats at cards.)
 And his footprints are not found in any file of Scotland Yard's.
 And when the larder's looted, or the jewel-case is rifled,
 And when the milk is missing, or another Peke's been stifled,
 Or the greenhouse glass is broken, and the trellis past repair—— (21-25)

21行目で「外見は紳士風である (He's outwardly respectable)」のに、「カードでいかさまをやる」という噂がある (They say he cheats at cards)」と、猫の二面性が語られる。その他、宝石箱が荒らされるやら、犬が絞め殺されるやら、温室のガラスが破られ、格子垣は修理不能・・・と悪事の限り。

[27～33行目] 外務省 (the Foreign Office) が条約文書を紛失し (a Treaty's gone astray)、海軍省 (the Admiralty) が設計書や図面 (some plans and drawings) を盗まれる。警察の捜査は混乱し、秘密諜報機関はMacavityの仕業だと確信するが、猫はとうに安全圏に逃げ、長い複雑な割り算 (complicated long division sums) をやっている。

And when the Foreign Office find a Treaty's gone astray,
Or the Admiralty lose some plans and drawings by the way,
There may be a scrap of paper in the hall or on the stair——
.
You'll be sure to find him resting, or a-licking of his thumbs,
Or engaged in doing complicated long division sums. (27-33)

外務省、海軍省、設計図と来れば思い出す人もあるだろう。Arthur Conan Doyleのシャーロック・ホームズ・ミステリーの一つ、「ブルース・パーティントン設計書 ("The Bruce-Partington Plans")」事件である。盗まれたのは潜水艦の設計図 (plans) で、外務省と海軍省が蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。外務省から条約文書が盗まれたのは「シャーロック・ホームズの思い出』の中の「海軍条約文書事件 ("The Naval Treaty")」である。

[34～41行目] Macavityは手がかりを残すようなへまなまねはしない。世間に名の知れた凶悪な猫も数々あるが、みなMacavityの手先 (agents) にすぎない。Macavityが彼らの動きをコントロールしているからだ。まさに、彼こそは犯罪のナポレオン。

And they say that all the Cats whose wicked deeds are widely known
(I might mention Mungojerrie, I might mention Griddlebone)
Are nothing more than agents for the Cat who all the time
Just controls their operations: the Napoleon of Crime! (38-41)

ここまで読めば、猫の正体は明らかだ。謎の"Mystery Cat"はMoriarty教授なのである。"The Napoleon of Crime"はシャーロック・ホームズの宿敵モリアーティ (Moriarty) 教授の異名である。ホームズは彼を「犯罪のナポレオン」と呼んだ。Moriarty教授が登場する「最後の事件 ("The Final Problem")」(1893年『ストランド』誌発表) でホームズは次のように語っている。

'He is the Napoleon of crime, Watson. He is the organizer of half that is evil and nearly all that is undetected in this great city He does little himself. He only plans. But his agents are numerous and splendidly organized. ("The Final Problem")⁸⁾

自分では手を下さず、手先 (agents) を使って、犯罪のシンジケートを組織しているところが、

Moriarty教授の「犯罪のナポレオン」たるゆえんである。手先 (agents) の動きをコントロールしている (38-41) Macavityとまったく同じである。

となれば、Macavityの「背が高く瘦せていて」「目がおちくぼみ」「額の出張った」特徴ある風貌もMoriarty教授のものではないだろうか。「最後の事件」で、ホームズがワトソンに語るモリアーティ教授の風貌の部分と比べていただきたい。

‘ His appearance was quite familiar to me. He is extremely tall and thin, his forehead domes out in a white curve, and his two eyes are deeply sunken in his head. He is clean-shaven, pale, and ascetic-looking, retaining something of the professor in his features. His shoulders are rounded from much study, and his face protrudes forward, and is for ever slowly oscillating from side to side in a curiously reptilian fashion. He peered at me with great curiosity in his puckered eyes. ("The Final Problem")⁹⁾

教授は"extremely tall and thin"で、Macavityの("he's very tall and thin")とまったく同じである。形容詞が"extremely"から"very"に変わっているだけのこと。また、"his forehead domes out"はMacavityの"his head is highly domed"と、同じ"dome"の語を用い、酷似した表現である。教授の"his two eyes are deeply sunken in his head"はMacavityの場合、"for his eyes are sunken in"と、これまた殆ど同じである。

さらにMoriarty教授は「顔を前へ突き出すようにして、ハ虫類かなにかのように、いつもからだを左右にゆり動かしている (and his face protrudes forward, and is for ever slowly oscillating from side to side in a curiously reptilian fashion.)」癖がある。これがMacavityにおいては"he sways his head from side to side, with movements like a snake." (15) となっている。これも"is oscillating"を"sway"に、"in a reptilian fashion"を"like a snake"と、子供向きに平易な表現に直しているものの、意味するところはまったく同じである。

以上のように細かい特徴の部分で、MacavityはMoriarty教授の描写をほぼそのまま取り入れている。また、Moriartyが教授風の面影を残している("He is clean shaven, pale, and ascetic-looking, retaining something of the professor in his features.")のも、Macavityでは「外見は紳士風 (He's outwardly respectable)」(21) と平易に改められている。ただし、Macavityは「カードでいかさまをするという噂がある (They say he cheats at cards)」(21) となっているが、カードでいかさまをするのはMoriarty教授ではなく、教授の手先 (agents) の一人で、「空き家の冒険」に登場するモラン大佐 (Colonel Moran) の特技である。("Now Moran undoubtedly played foul—of that I have long been aware." (「空き家の冒険」 "The Empty House")¹⁰⁾

また、"Macavity: the Mystery Cat"の23行目から25行目に、Macavityの犯した犯罪が列挙されている (When the larder's looted, or the jewel-case is rifled, /Or when the milk is missing, or another Peke's been stifled) が、これもホームズがワトソンに、"Again and again in cases of the most varying sorts — forgery cases, robberies, murders —"と、Moriarty教授の犯罪を数え上げるのに符号する ("The Final Problem")¹¹⁾。

Moriarty教授は数学の教授なので、Macavityがお尋ね者の猫でありながら、「長く複雑な割り算に没頭している（・・・engaged in doing complicated long division sums）」(33)のも不思議ではない。教授は21歳の時に二項定理の論文を書いたという数学の天才なのだ。（"He is・・・endowed by Nature with a phenomenal mathematical faculty. At the age of twenty-one he wrote a treatise upon the Binominal Theorem, which has had a European vogue."）("The Final Problem")¹²⁾

このように、1行目の"Mystery Cat"から始まって、"Scotland Yard", "scene of crime", "the Foreign Office", "the Admiralty", "a Treaty's gone astray"と次々にHolmes ゆかりの言葉をばらまき、Moriarty教授の特徴をそっくり取り入れ、最終行を"the Napoleon of Crime!"で締めくくる。これがMacavityの正体を示す決定的な言葉なのである。

なお、マカヴィティの名前は、池田雅之氏によれば独裁者論を書いた「マキアヴェリ (Machiavelli)」と「モリアーティ (Moriarty)」をあわせたものだという。だが、音韻を考えると「マキアヴェリ」と「重力=引力 (gravity)」を合体させたとも考えられる。というのも、この猫は空中浮揚 (levitation) をするのであって、その際に「引力の法則に逆らう (he breaks the law of gravity)」反逆者魂が、「法に逆らって生きる」この猫の生き方と合致するからだ。また、「macabre (死の、背筋の凍るような)」という言葉も含まれているのではないだろうか。いずれにせよ、Macavityの名は"Macavity: the Mystery Cat"と頭韻を踏み、18行目では「邪悪な怪物」(a monster of depravity) の「depravity」とも韻を踏む。"Macavity, Macavity, there's no one like Macavity."の1行がリフレインとして繰り返し使われることからみても、音の効果を第一にねらった名前であることは間違いない。

最後に、何故、エリオットがMoriarty教授を使ったかである。Old Possum'sには全部で15の詩があるが、どの詩もロンドンっ子らしい猫の生態、ロンドンらしい情景が描かれている。この詩が書かれた1939年と言えばまだ第一次大戦の記憶も生々しく、新たに第二次戦争が始まる年でもある。時代の気分としては、猫や子供、愛読書の世界へでも逃避したいということであったのだろう。名探偵ホームズは、童謡や『不思議の国のアリス』と同じように、子供にも大人にも通用する普遍的な英雄である。また、ホームズが、ロンドンの住人で、しかも英国人らしい性格と雰囲気を持つ人物であることもロンドンっ子の猫を描いた詩集にふさわしい。ただし、余りにも有名な探偵本人ではなく、その宿敵のMoriarty教授を出したところなど、一筋縄ではいかないエリオットらしい使い方である。

付記（一）

(11) の劇場猫ガスはかつて虎の役を演じたことがある。("He once played a Tiger — could do it again — / Which an Indian Colonel pursued down a drain.") (Ⅲ, 5-6) ここにあげられている「インドの大佐」も、「空き家の冒険」のモラン大佐 (Colonel Moran) と考えられる。(・・・ and the story is still told in India how he crawled down a drain after a wounded man-eating tiger.)¹³⁾

付記（二）

エリオットは1933年に、"Five-finger exercises"という5部からなる、軽妙な詩を書いている。その(1)は「ペルシア猫によせる歌」、(2)は「ヨークシャー・テリアに寄せる歌」で、これにはポリクル犬もジェリクル猫も登場する。(4)の「ラーフ・ホジスン氏によせる歌」には「バスカヴィルの犬」が登場している。(Arthur Conan Doyle, *The Hound of the Baskervilles* は1902年の発表)

付記（三）

コナン・ドイルは1859年スコットランドのエディンバラに生まれ、1887年に長編小説『緋色の研究 (*The Study in Scarlet*)』を発表した。この作で、世界中に多くのファンを持つ私立探偵シャーロック・ホームズが初めて登場した。1891年、『ストランド』誌上に「ボヘミアの醜聞」以下、毎月短編が発表されるようになって、ホームズは一躍人気を得た。その後、ホームズものの連載は長期間におよび、1893年の「最後の事件」で一旦ホームズを宿敵モリアーティ教授との格闘で死んだことにしたものの、1903年には読者の要望に応じてまた生還させ、結局、1927年までホームズの物語を書き続けた。エリオットの思春期、青年期はちょうどホームズの物語が次々に生み出され、熱狂的に受け入れられていた時期にあたる。ドイルは人気雑誌『ストランド』にホームズものを連載したほか、同じ雑誌に歴史小説、冒険小説など多数の小説を発表し、1890年代から1930年に没するまで読書界に大きな影響を与え続けた¹⁴⁾。

[テキストについて]

テキストはT. S. Eliot, *Complete Poems and Plays 1909-1950* (Harcourt Brace, 1952, 1980) に拠る。ただし、これには"Cat Morgan Introduces Himself"は入っていない。本稿では以下の2種のペーパーバック版も使用した。

T. S. Eliot, *Old Possum's Book of Practical Cats* (Harcourt Brace, 1982).

T. S. Eliot, *The Illustrated Old Possum: Old Possum's Book of Practical Cats* (Tsurumi-shoten, 1980, 1997).

前者はEdward Goreyの白黒の挿絵入り。後者（鶴見書店版）は、1940年にNicolas Bentleyの挿絵入りで出版されたFaber and Faber版に基づいた大学用教科書。巻末に注と、Bentleyのカラフルな挿絵入りで、Peter Milward氏による朗読テープもある。

邦訳は池田雅之訳『キャッツ——ポッサムおじさんの猫とつき合う法』（ちくま文庫、1995）が手に入りやすい。これもNicolas Bentleyの挿絵入り。

『エリオット全集』第一巻（中央公論社、1960、1976）に収められている二宮尊道訳「おとぼけおじさん猫行状記」は名訳。他に、北村太郎訳『CATS T. S. エリオットの猫詩集』（大和書房、1983年）がある。

- 1) この覚え書きは2005年7月31日に日本シャーロック・ホームズクラブ関西支部（於：宝塚市南口会館）で口頭発表したものに基づき、発展させたものである。
- 2) 池田雅之『想像力の比較文学』（成文堂、1996年）の「『キャッツ』の語られざる魅力 — エリオットからミュージカルへ」参照。
- 3) 高柳俊一『T. S. エリオット研究』（南窓社、1987）によると、Possum は北米に住むフクロネズミ、opossumのこと。Opossumは驚いたり、捕まったりすると死んだふりをする動物。第九章「セントルイス」の（一）「オールド・ポッサムの顔」の項参照。
- 4) この詩の中ではFaber—or—Faberになっている。
- 5) T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays 1909–1950* (Harcourt Brace, 1952, 1980) には、この詩は入っていない。
- 6) この事実については日本シャーロック・ホームズクラブの真下庄作氏と松下了平氏からご教示いただいた。"Letters to the Editor", *The Time's Literary Supplement* (September 28, 1951).
- 7) Grover Smith, *T. S. Eliot's Poetry and Plays* (University of Chicago Press, 1950, 1956, 1971), p.322. See the Notes.
- 8) Arthur Conan Doyle, "Final Problem", *The Memoirs of Sherlock Holmes* (Penguin Books, 1950), p.239.
- 9) A. C. Doyle, "Final Problem", p.241.
- 10) Arthur Conan Doyle, "The Empty House", *The Return of Sherlock Holmes* (Penguin Books, 1950), p.29.
- 11) "The Final Problem", p.239.
- 12) "The Final Problem", p.239.
- 13) A. C. Doyle, "The Empty House", p.27.
- 14) ドイルの年表は河村幹夫著『コナン・ドイル』（講談社新書、1991）を参考にした。

Summary

T.S.Eliot's *Old Possum's Book of Practical Cats* — a collection of light verse for children — reveals some of his wit, humour and love of word-play. He uses a couple of impressive words from *Alice in Wonderland*, with his typical cynical twists. He also borrows some familiar words and rhythms from *Mother Goose* rhymes, so that his poems take on a traditional style and feel.

In "Macavity: the Mystery Cat", T.S.Eliot asks us a riddle which lovers of mystery novels can easily solve. "Macavity's a Mystery Cat, the Napoleon of Crime!" "The Napoleon of Crime" is the key to solve this riddle, for Macavity, the master criminal cat, when carefully read, is none other than Professor Moriarty, Sherlock Holmes's arch-enemy.

In this memorandum, I will show how Eliot creates Macavity's physical features and criminal career using Arthur Conan Doyle's well-known series of stories. My chief aim here is not to claim to be the first to recognize this hidden riddle but to describe how remarkably well the character of Professor Moriarty fits into the world of Eliot's poems of practical London cats.